発言

豊橋技術科学大学
副学長
中野 裕美

「利他の心」とダイバーシティ&インクルージョン

以前の「発言」で視点を変えることで技術革新をするという記事を書きました。

視点を変えるという点では少し共通点がある「利他（りた）の心」が、なぜダイバーシティ推進や技術開発、企業経営にまで必要とされるのか？　話題を提供し、考える機会とさせていただきます。

利他の心とは

「利他」とは、自分の利害はさておき、他人に利益となるよう図る心であり、「利己（自分だけが良ければいい）」とは逆の心です。「利己」という狭い視野にとらわれず、「利他」の心で広い視野を持つことで、正しい判断力、決断力も生まれるのです。

稲森和夫氏をはじめ、トップの方たちが、この「利他の心」を経営学と合わせて説いています。また、浄土真宗の精神を建学の精神とする龍谷大学では、行動哲学として、「自省利他」（常に自分を省みて、他の幸せや利益を追求する）を精神の根底にした教育をされています。

インクルージョンの本質

なぜ「利他の心」が「ダイバーシティ&インクルージョン」や経営に結びつくのか、私の理解の範囲で解説したいと思います。

ダイバーシティとは「多様性」であり、個々の人材がいる状態です。その多様な人材が機能的に結びつき、相互に機能する状態が「インクルージョン」です。その際に必要となるのが、「違いを認め、活かし、高めあう」ことです。個人の能力を100%活かすためには、お互いのことを理解し、個性を発揮できる組織、風土が必要になるわけです。そのために必要な心こそが「利他」の他人を思いやる心なのです。ジェンダー、人種、宗教、価値観、LGBT、障がいなど、「みんな違って、みんないい」と、個性を認める心を持つことで、相互の信頼関係が増し、個々の能力を発揮しやすい環境になると思います。

稲森和夫氏は、「利他の心で判断すると『人に良かれ』という心なので、周りの協力が得られ、視野も広くなり、正しい判断ができる」と説かれています。タフな課題解決をする際、自分の利益や都合を基準にしていては、リーダーとして組織をけん引することが難しいことは、想像に難くないです。

「利他」は一見精神論のようですが、視点を変えるという点では、技術革新にもつながる考えだと思います。会社の利益だけ考えていても、良い商品開発にはむすびつきません。顧客の視点で商品開発をすれば、よりよい商品となり、長く愛される商品となることでしょう。それにより、企業も利益を上げることができるわけです。

学長とくるみん認定書

（2面へ続く）

発　言

豊橋技術科学大学
副　学　長
中野　裕美

（1面から続く）

ミスディレクションに気づく

最近話題になっている、マジシャンでもあり精神科医でもある志村祥瑚氏は、マジックと精神医学を融合し、新体操のメンタルコーチを務めています。簡潔に言えば、「思い込み」によるミスディレクション（間違った方向）への誘導に気づき、それを外すことということです。人の思い込みを利用したマジックもビデオで公開されています。無意識の思い込み（アンコンシャスバイアス）が、目を曇らせ、判断力を鈍らせていることを再認識できます。

近年、新型コロナウイルス禍での不安も重なり、心のケアを必要とする学生さんが増えたように感じます。私の研究室でも沈みがちな学生さんの相談に乗る機会が増えました。学生さんが変わるきっかけになるのは、自分中心（利己）に考える軸を持たないで、人を思いやる（利他）心を持つように話をする時です。「人のことにかまっている余裕はない」と思いますか？　そうではなく、「自分はなぜできないのか？（ネガティブ思考）」という負のループに入るくらいなら、その時間で「自分は人や社会のために何ができるのか？（ポジティブ思考）」を考えるのです。そうすると、考える軸が変わるのですから、自分のことを悩む時間が減り、周りの世界とつながろうとする思いができます。自分が得をすることばかり考えるのではなく、人に良かれという思いは、心が豊かになる。そんな話をして、学生さんたちは、いま元気に社会人として活躍しています。

人は、時にミスディレクションにより、悩むことがありますが、そんな時、考える軸を少しだけ他人（社会）に向けてみてはいかがでしょうか？

「利他の心」とダイバーシティ＆インクルージョン

炎上CMでよみとくジェンダー論

これは瀬地角先生（東京大学・ジェンダー論）が2020年に発行した書籍のタイトルです。放映されたCMの中で炎上したものを取り上げ、ジェンダー的視点からわかりやすく解析されています。

たとえば、化粧品のCMで、働く女性に『「頑張ってる」を顔に出さない。#いい女になろう』というメッセージとともに、ファンデーションを塗る女性が放映されました。「どんなに疲れていてもきれいでいなさい」というメッセージとして受け取った多くの女性からの批判を受け、このCMは中止されたようです。「疲れを顔に出さない＝きれいに化粧をする（外見を整える）」というコンセプトは、ちょっと違いますよね。この微妙な気持ちの差は、CM製作者には理解できなかったのかもしれません。ただ、ほんの少し、女性の立場に立って考えたら、もう少し違った構成のCMになったことでしょう。

またこの本で、男性の家事への関わり方について、レベル0からレベル4まで区分され、解説しています。その中に、「ゴミ出しは家事ではない」とか、「家事は手伝うものではない」という記述に、思わず拍手を送りました。男性が自ら家事をし、「利他の心」で家庭内がより円満になることを期待したいと思います。

如実知見

この言葉は、2002年に龍谷大学が、理工学部創設10周年を記念し発行された書籍のタイトルです。「如実知見（にょじつちけん）」とは、「物事をありのままにみよ」という仏陀の教えです。今回、「利他」を理解するために、改めて読み返してみました。

この本の中に、上山大峻先生（当時龍谷大学学長）が「仏教と科学」をテーマに書いているので、一部をご紹介します。本願寺第22代宗主の大谷光瑞師は「仏教は科学である」と明言されたそうです。どういう意味？と思われた方に、上山先生の記述を引用します。「科学も仏教も同じ方法で事象の観察を行う」つまり、科学も仏教も、現象や事物をありのままに観察し、法則性を見出すことが類似点であるが、目的が大きく異なるのだと述べられています。科学は「未知なるものを知りたい欲求」、一方で仏教は「生きたい欲求」の実現にあり、これが基本的な違いであるのだと。さらに詳しく違いが書かれています。上山先生は最後に、人間は「知りたい欲求」と「生きたい欲求」が相互に学びあい批判しあって、バランスの取れた関係を保つことが重要であり、仏教と科学を総合した21世紀をリードする新しい知の構築が望まれると結んでいます。

集めて、繋いで、光をあてる

この言葉は、本学、豊橋技術科学大学の寺嶋一彦学長が所信表明で述べられたもので、繰り返し提唱されています。「学長として、優秀な人材や資金を集める。そして、その人脈をネットワークでうまく繋いで有機的に働くようにする。そして、芽が出るように光をあてて、そして世界において光るようにする（学長新年挨拶より引用）」。

誰もが輝ける大学になるために、個性を認め、活かし、高める、「ダイバーシティ＆インクルージョン」の考え方がここにもあります。寺嶋学長は、学生から教職員まで、「寺嶋塾」を数回に分けて開催され、多くの人とコミュニケーションをとる機会を作ってこられました。

2022年7月21日に、本学は厚生労働大臣より子育てサポート企業として「くるみん認定」を受け、同時に「イクボス宣言」も行いました。認定条件には、男性の育児休業取得率が大きなカギとなります。育児や介護休業を取得しやすい職場雰囲気を作り、「育児・介護のための応援メッセージ（20年度）」を発行しました。ダイバーシティ＆インクルージョンの風土が醸成されてきた成果だと、スタッフ一同喜んでいます。

今回はここで筆をおきます。